

非肥満の健診受診者における非アルコール性脂肪性肝疾患発症のリスク因子

目的：非アルコール性脂肪性肝疾患（non-alcoholic fatty liver disease: NAFLD）は、頻度の高い慢性肝疾患であり、日本においても世界的にも増加傾向にある。NAFLD は肝癌の発生母地になり、また、NAFLD を有していると総死亡や心血管疾患のリスクが上昇することも報告されており、重要な健康課題である。NAFLD は肥満者だけでなく非肥満者（BMI<25kg/m²）にも発生するが、リスク因子についての報告は乏しく、一定の見解は得られていない。先行研究の多くは横断研究であり、特に体重変化を縦断的に検討した研究は少ない。本研究では体重変化を考慮に入れた非肥満者の NAFLD 発症のリスク因子について評価した。

方法：2008年1月1日から2018年12月31日の期間の、聖路加国際病院附属クリニック 予防医療センター健診受診者の健診データを検討した。研究期間内の30歳以降の初回受診をベースラインとし、超音波検査による脂肪肝をアウトカムとして、ベースライン時点でNAFLDを合併していない非肥満者を追跡した。初回受診から2年後の時点で脂肪肝を合併していない者を対象に、ベースラインからの体重変化の影響をランドマーク解析で評価した。また、ベースラインからの体重変化を時間依存性変数として含んだCox回帰モデルでも体重変化の影響の評価を行った。

結果：解析対象者は41579例で、女性26559例（平均年齢44.3歳）、男性15020例（平均年齢43.9歳）であった。初回受診から2年後の時点で脂肪肝を合併していない者については、ベースラインからの体重増加1kgあたりの脂肪肝発症のハザード比は女性で1.16（95%信頼区間1.12-1.20）、男性で1.14（95%信頼区間1.10-1.18）であった。ベースラインからの体重変化を時間依存性変数として扱った場合も、ハザード比は女性で1.12（95%信頼区間1.10-1.13）、男性で1.13（95%信頼区間1.12-1.15）で、有意なリスクであった。また、脂肪肝発症の他のリスクとして、脂質異常、糖代謝異常、尿酸代謝異常、喫煙が有意であった。

結論：非肥満者において、体重増加はNAFLDの発症のリスクである。